

ベトナム・イギリス・アメリカの教育視察

…平成12年度の附属学校等教官海外教育事情視察派遣団に参加して…

矢木 修

【抄録】 平成12年11月2日から26日までの25日間、国立大学・学部附属学校等教官海外派遣の一員として、ベトナム、香港、イギリス、アメリカの教育事情の視察をしてきた。日本の2～30年前を思わせ、これから世界に羽ばたこうとしている社会主義国のベトナム、ナショナルカリキュラムで各学校の教育力が試されているイギリス、子ども達一人ひとりの個性を尊重し、障害者に対する手厚い教育政策をとっているアメリカ等、各国での生活文化を体験しながら感じた、それぞれ特色ある教育事情を報告するものである。

【キーワード】 教育制度 初等教育 中等教育 継続教育 障害教育 ベトナム イギリス アメリカ

1. はじめに

平成12年11月2日から26日までの25日間、国立大学・学部附属学校等教官海外派遣の一員に選ばれた。本校としては過去2年に一人の割合で回ってきたのだが、幸運にも平成11年度の飯島先生の派遣に続いて回ってきた。本校が今年度から併設型の中高一貫校に改組になったお陰か、とにかく私を派遣団の一員に加えて頂いたことに文部科学省の関係者及び本校の教職員の方々に感謝したい。

全国の国立附属学校（幼稚園、小学校、中学校、高等学校、養護学校）の先生方、総勢26名の団体で、派遣先はベトナム、中国（香港）、イギリス、アメリカの4カ国であった。それぞれの国の小学校、中学校、高等学校、養護学校を視察し、その成果を今後の教育活動に活かしていくことが、今回の派遣の目的であった。過去の派遣では比較的先進国の教育事情視察が殆どであったが、今回ベトナムが組み入れられ、発展途上国から先進国と、両方の教育事情を視察でき、私にとっても参考となった。



2. 各国の教育制度

(1) ベトナム

就学前教育は3～5歳の幼児を対象として幼稚園で行われている。幼稚園の設置者は、市町村・地域・企業等多様だが、教育目標や内容、教員・管理者の養成・研修は全て教育・訓練省が定めている。他にも生後3ヶ月～5歳の幼児を対象とした就学前施設、生後3ヶ月～3歳の幼児を対象とした保育園もあるが、これらも教育・訓練省が所管し、保健省や各種関連団体の協力を得て各施設を監督している。

義務教育は6～11歳の5年間である。教育課程の基準は教育・訓練省が定めている。私達が訪問した小学校は、ベトナムの中では相当恵まれた環境であったが、それでも一クラス50名前後の過密クラスであった。このように学校数が少ないこともあって、都市部でも午前の部、午後の部というように2部制を採用している学校も少なくないとのことである。条件が整備された地域の学校では、ベトナム語上級、外国語、数学、情報科学、音楽、美術等の授業が選択教科となっており、児童は2教科、週当たり各教科6単位時間を超えない範囲で履修している。

1980年代以降政府が初等教育普及に力を入れたため、10歳での在学率は1990年に全国平均85%にまで高まった。しかし、山間部では50%程度ということで、義務教育というものの厳しい状況にあり、地域差が大きくいったん入学しても留年したり、中退したりする子どもも少なくない。

初等教育最終の第5学年修了時に全国共通の修了試験が実施される。合格者には初等教育修了証が授与され、この修了証を取得したものが中等教育を受けられる制度となっているが、経済的理由等で修了証を取得できる者は入学者の6割程度とのことであった。



教育環境においても、前述したように、全国的に2部制が採用されている他、耐久性のある校舎・教室も少なく、さらに教科書についても全教科書を持つ生徒は半数以下であったり、教員も正規の教員養成を受けていない者も少なくない。

中等教育については、前期中等教育（下級中等学校4年間）と後期中等教育（上級中等学校3年間、技術職業教育学校）とに分けられている。

下級中等学校は終業年限4年であるが、入学にあたっては初等教育修了証の取得が必要である。この下級中等学校の教育課程の基準も教育・訓練省が定めている。ここでは、ベトナム語、文学、歴史、地理、公民、数学、物理、化学、生物、体育、外国語、技術で週25～27時間と、集団活動、職業指導、技術職業教育を5時間履修している。

そして4年修了時に全国共通の修了試験が行われ、これに合格すると前期中等教育修了証が授与される。

上級中等学校は、高等教育に進むための準備教育や、就職に向けた職業教育を目的とし、修業年限は3年である。この学校に入学するためには、前期中等教育修了証を取得し、入学試験に合格しなければならない。この教育課程も教育・訓練省が定めている。ここでは、文学、ベトナム語、歴史、地理、公民、数学、物理、化学、生物、体育、外国語、技術で週24～26.5時間と、集団活動、職業指導、技術職業教育を5時間履修している。

技術職業教育学校には中等技術学校、中等職業学校、職業訓練学校があり、中等技術学校は中級レベルの技術者養成を目的としており、工業、農林・水産、経済、医療、教育等の職業に関する教育を行っている。下級中等学校終了後に進む課程と上級中等学校終了後に進む課程があり、前者の修業年限は3～3.5年で、通常の職種についての技術者養成で、後者は修業年限2～2.5年とし、高度な知識技能を必要とする職種の技術者養成である。いずれも修了者には中等技術修了証が授与される。

中等職業学校は下級中等学校修了者を対象とし、

技能労働者の養成を目的としている。修業年限は3～4年となっている。

職業訓練学校は、技能労働者の養成を目的とし、初等学校修了者を対象とした下級中等学校段階と、下級中等学校修了者を対象とした上級中等学校段階の2つのコースがある。

高等教育は、大学とカレッジがあり、大学には長期課程（4年、一部5～6年）があり、カレッジには長期課程と短期課程（3～3.5年）がある。

教育制度については以上であるが、教育環境については、前述したように初等、中等教育ともに、1クラスの人数が多い、施設設備の整備の遅れ、教科書を持つ生徒も半数以下等日本の4～50年前の感じであった。さらに正規の教員養成教育を受けている教員も少なくないという状況であった。しかし、教育局長の話では、1975年以降南北が統一され、教育改革に取り組んでいるとの事である。特に教育予算を増大させ、コンピュータの設置及びその指導者の養成、外国語（英語）の充実に力を入れているとの事であった。小学校、中学校、高等学校等私達が訪問したどの学校を見ても、子ども達、教師達共に、真剣に教育に取り組んでいて、これからのベトナムには光が見えるという感じであった。

(2) イギリス

就学前教育は、2～5歳未満児対象の保育学校（nursery school）、3～4歳児に就学前教育を提供する初等学校付設の保育学校（nursery class）、初等学校入学直前の児童を対象としたレセプションクラスがあつて、在籍率は3～4歳児の平均で55.5%である。

地方教育局はこの就学前教育の提供を義務づけられてはいないが、ほとんどの地方教育当局は、無償の就学前教育を提供している。

義務教育は、5～16歳までの11年間である。しかし、義務教育といっても就学義務を意味するものではないとされ、子どもを学校に通わせていない家庭もある。ただし、地方教育局はその家庭教育が適切であるかどうか監督する義務を負っている。

初等教育は5～11歳の6年間で、多くは6年制の初等学校（プライマリースクール）で行われる。この初等学校はさらに幼稚部（5～7歳）と下級部（7～11歳）に区分されてる。また、初等教育から中等教育へスムーズに移行するために、ファーストスクール（初等段階）とミドルスクール（初等・中等）を設けているところもある。

中等教育は12～16歳の5年間である。しかし、最近では前期（5年、義務教育段階）と後期（2年）を



併設する7年制の総合制中等学校が一般的な中等教育の学校である。この学校は初等学校の卒業生を原則として無試験で受け入れている。また、義務教育後の中等教育はシックスフォームと呼ばれ、7年制中等学校の後期課程で行われ、大学入学資格上級(GCE・Aレベル)及び準上級(同ASレベル)試験のための準備教育が行われている。この他、1988年教育改革法によって設置が認められた新しい学校で、主として都市部の12~18歳を対象として、科学技術や芸術のための技術に重点を置いて継続教育を行うシティテクノロジーカレッジ、芸術テクノロジーカレッジが中等教育機関として設置されている。

以前は学校において教えるべき内容は、学校、教師によって任されていたが、サッチャー政権の1988年の教育改革法によって、全国共通のナショナルカリキュラムが導入された。これは数学、英語、理科を中核教科として、歴史、地理、技術、音楽、芸術、体育および現代外国語を基礎教科と呼び、義務教育における必修科目と定めている。この全国共通ナショナルカリキュラムでは、教科の内容や到達目標について定めているが、各教科の配当時間については定めてはならないとされている。合わせて、7歳児、11歳児、14歳児に対して、全国共通の到達度テストが実施される。その結果は全てマスコミで報道される。よって学校のランクが全て公表されることになる。また、定期的に国家教育監査委員会のメンバーによる監査が1週間入って、その学校に対して優秀、満足、不合格の監査結果を出している。このために、学校と保護者が連携して自分達の学校を優秀な学校にすべく努力をしている。

私達が訪問した学校は、殆どが1クラス20人前後で、小学校では保護者が先生を手助けし授業を行っていた。また、障害者が健常者と一緒に教育を受けていて、その為の体制も経済的、人的な援助がしっかり出来ていた。

(3) アメリカ

州、学区によって教育制度は様々な形態がある。6-3-3年制、8-4年制、6-6年制、5-3-4年制、4-4-4年制等である。そして、全ての州で初等中等教育の12年間は、義務教育年限に関わりなく、希望者は全員受け入れる制度となっている。

就学前教育は3~6歳で保育学校、幼稚園がある。このうち幼稚園はほとんどが公立で無償である。保育学校はほとんどが私立であるが、公費補助を受け、教育目的により無償となることもある。

義務教育は6~15歳で、6~12歳が小学校、12~15歳が下級ハイスクール、15~18歳が上級ハイスクールとなっていて、下級と上級併設のハイスクールもある。また、10~14歳のミドルスクール、14~18歳の4年制のハイスクールもある。これはアメリカ全体の教育制度の大まかなものであり、基本的には各州独自の制度で教育行政を進めていて、年度の基準日も州によって違うので、別の州に転校すると、それまでと違う学年に配属されることもあるという。

私達はアメリカ独立戦争が行われたマサチューセッツ州レキシントンに公式訪問したので、この州についての様子を記することにする。

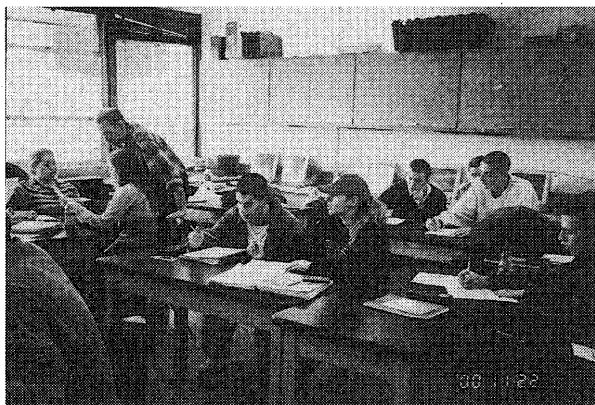
レキシントンはアメリカでも先進的な障害教育を実践していた。イギリスでもそうであったが、それ以上に障害者を普通学級に組み入れ、インクルージョンの教育を行っている。私達が参観したとき、誰が障害者か全く分からないほどサポート体制が充実していた。

レキシントンの公立学校では、差別をしないと言うことが基本政策となっており、人種、性別、皮膚の色、宗教、出身国、年齢によって差別されることはない。また、3歳から高校卒業までは公教育として、22歳までは教育を受ける権利を有している。

レキシントンの小学校では、特別なプログラムで、コアカリキュラムを包含する普通教育を実践している。さらに、親が地域の子どもを教育するという事で、教員と一緒に仕事し、機会に応じて学校で働くボランティアが派遣されている。また、どの学校にも学校長に進言するスクールカウンセラーが配置されている。

中等教育のミドルスクールでは、地域社会を積極的に学ぶことを中心に据えている。英語、芸術、健康教育、算数、物理、科学、社会、外国語(フランス語とスペイン語)を学習している。

ハイスクールでは、現代の社会に必要とされる能力を、すべての生徒が発展させることができる教育



課程を提供している。生徒には、教育を受ける権利、均等な教育の機会の保障、集会の自由、宗教の自由、プライバシーの権利、体罰を受けない自由等が、生徒の権利として保障されている。

レキシントンで最後に訪問したThe Cotting School（養護学校）では年間の授業料約3万ドルは全て障害者が住んでいる州、町が全て負担するという体制で、働けるようになるための学校と位置付け、個々にあったカリキュラムが実践されていた。勉強以外に、自尊心を高めること、社会的なスキルを高めることが大事にされていた。

多くのスタッフと優れた医療設備は全米でもモデル学校となっているとのことであった。

3. 世界一周して得たもの

今回私達が訪問したのは、ベトナムのハノイ、ホーチミン、中国の香港、イギリスのバース、ロンドン、アメリカのボストン、レキシントン、サンフランシスコで、まさに世界一周であった。それぞれ訪れた都市でいろいろ体験したが全てが私を興奮させた。

(1) ベトナム（ハノイ、ホーチミン）

11月2日香港経由でハノイへ。空港からバスで高速道路を通って市内へ。バスから見る風景は自分の子どもの頃を思い出す田園風景。夕日が沈み辺りが暗くなっても、機械に頼らないで牛を使って一生懸命働く農夫達。高速道路といってもいわゆる生活道路で、数匹の子豚を入れた駕籠を荷台に取り付けのどかに走るバイク、何を見ても何か心に快く響いてくる懐かしい風景であった。ハノイ市内に近付いてきても、町全体が電気を節約しているのか暗い。部分的に明るい所が見に入ってくると、それは日本から世界に輸出された「karaoke」のネオンであった。町の中心街に近付いて道路はバイクだらけ。日本の暴走族が喜びそうなクラクションをけたたましく鳴らして我先と走っていく。人も横断歩道があっても、信号があっても、それには関係なく道

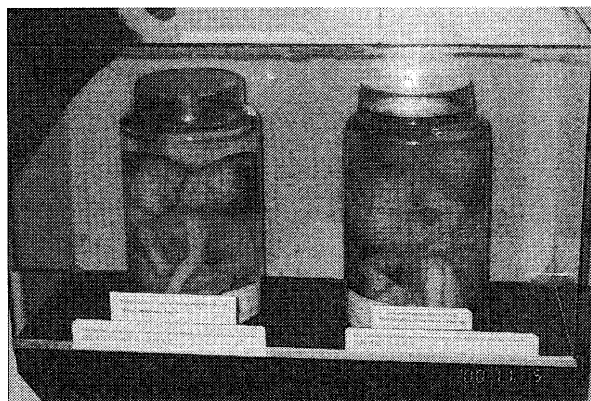
路を横断していく。しかし意外に事故はない。車は人を上手く避けて走っていくのだ。私達一行も初め躊躇していた道路横断もすぐにベトナム式横断に慣れて、時には交差点を信号を無視して、あたかもスクランブル交差点のような感覚で横断できるようになった。

ハノイではいろいろな文化施設を見学したり食文化に触れ合うことが出来た。ベトナムはもともと漢字圏で昔の科挙試験合格者の名を刻んで奉っている文廟、ベトナムの絶対的英雄ホーチミン廟等の見学、市民の生活ぶりが色濃く出る市場見学等も面白かった。食生活での一番体験は、薄暗い路地の屋台で食べた「ホピロン」であった。これはアヒルの孵化寸前のゆで卵であったが結構美味しかった。といっても薄暗い所であったから食べることが出来たが、明るい所では果たして食べることが出来たかどうか。

いろいろな刺激を受けて瞬く間に2日間が経ち、今度はベトナム経済の中心地ホーチミンである。昔南ベトナムの中心地であったサイゴンである。ハノイに比べるとやはり活気がある。でも物価はハノイよりやや高いとのことであった。

ここはベトナムでの公式訪問地でもある。我々が訪問した幾つかの学校はベトナム文部省から推薦してくれた学校であるから、教育環境は整った学校であったが、それでも日本から考えると相当遅れている感じがした。社会主義の国なのか、先生には絶対的服従といった様子で、体罰的な場面も見られた。しかし、ベトナムにはアジアの儒教思想が今も残っており、師を敬う意味で「教師の日」が制定されていて、この日は国全体が教師の日頃の教育に感謝し、子ども達は教師に花束を贈ったりするそうである。うらやましい限りである。我々も日頃からそのように感謝されるような教育をしなければと思った。

このホーチミンでの体験の中で印象に残ったのは、「戦争証跡博物館」訪問である。ここにはベト

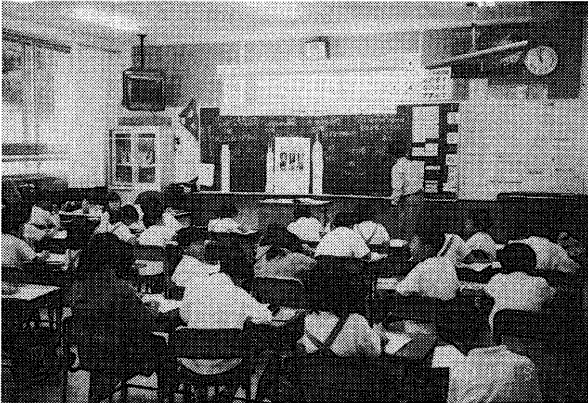


ナム戦争で使われた兵器や、当時の世界の一流写真家による悲惨な記録写真等が展示してあった。ピューリツァ賞を受けた沢田教一の写真も含まれていた。これらの展示の中で特に枯れ葉剤の影響で奇形となった胎児のホルマリン漬けであった。目を背けたくなるものであるが、敢えて写真を撮ってきた。人類と平和、環境問題を考える上で貴重な教材となると考えてのことである。

(2) 香港

この香港では日本人学校小学部が公式訪問である。私自身昭和59年から62年までアテネ日本人学校で勤務していた関係、国は違うものの日本人学校の実状と問題点等は理解できる部分が多かった。基本的には日本の学校と全く同じと行ってよかった。学校の雰囲気はベトナムの初な感じから、何かすれた感じがして、教育の場にも生活の利便さを求める余り何かを忘れてきてしまった様な気がした。

香港では丸2日滞在したが、自由行動の時に九龍公園に行ったとき、現地の幼稚園の遠足に出会った。日本と同様に全員が制服を着用し、全員が手をつなぎ可愛らしく先生に引率されていた。

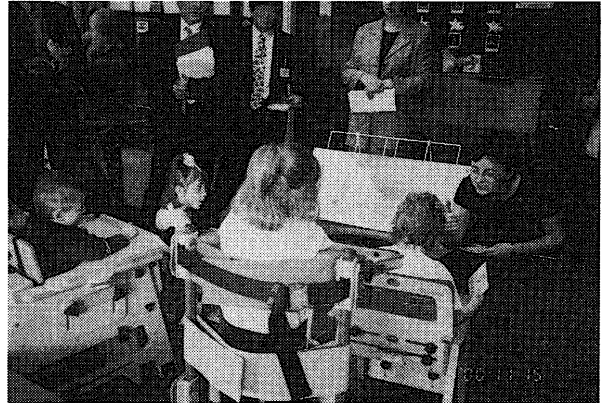


(3) イギリス (バース、ロンドン)

23時55分香港発5時7分ロンドン着の深夜便、時差の関係で13時間強の飛行。よくエコノミー症候群にかからなかったものだ。ベトナム、香港と夏のような気候から一気に冬の気候、しかも早朝で雨模様、本当に寒かった。そこからバスで、ソールズベリー経由で巨岩遺跡のストーンヘイジへ。この遺跡には関心がありゆっくり見学したかったが、本格的な雨となり、また風も強くなり、しぶしぶ短時間の見学でそこをあとにし、風呂の語源となったバースへ直行。昼にホテルに到着して、近くのパブで昼食を取ることにした。ワンポイントビアーにステーキを注文。ステーキの盛り付けがポテト、マッシュルーム、トマトと山盛り。西洋人のあの体力は通常のこんな食生活からと妙に納得してしまった。

翌日は日曜日で、ゆっくりバース市内の見学やす。ローマ浴場跡やコスチューム博物館、そしてロイヤルクレセント等の名所見学。日本で言えば萩か津和野のような古都で、何となく落ち着く街であった。夜は、「月と6ペンス」なるレストランでフランス料理を満喫。店の名前からして小説の中に入り込んだような気分になり、古都の夜を十分に楽しんだ。

11月13日(月)から3日間、バーススパ大学での講義、小学校、中等学校、養護学校そして生涯教育のシティーカレッジ視察と過密スケジュールであった。何処の学校も国家教育監査委員会の監査では優秀な評価を受けている学校で、先生方、子ども達共に伸び伸びと学校生活を送っていた。特に養護学校では、障害者達がセラピストの助けを借り懸命に訓練を受け、一生懸命生きている姿には感動せずにはいられなかった。



3日間のバースでの公式訪問を終え、翌日ロンドンに向かった。ロンドンでの滞在は2泊3日であった。昭和62年3月にアテネ日本人学校からの帰国時に訪れたときの記憶が蘇ってきた。当時は子連れでの買い物ツアーという感じであったが、今回は教育文化施設等見学ということで、大英博物館はもとより、ナショナルギャラリーでセザンヌをはじめ巨匠の美術作品に堪能してきた。また、本場のミュージカル「オペラ座の怪人」を鑑賞できたのも、私にとっての財産となった。

(4) アメリカ (ボストン、レキシントン、サンフランシスコ)

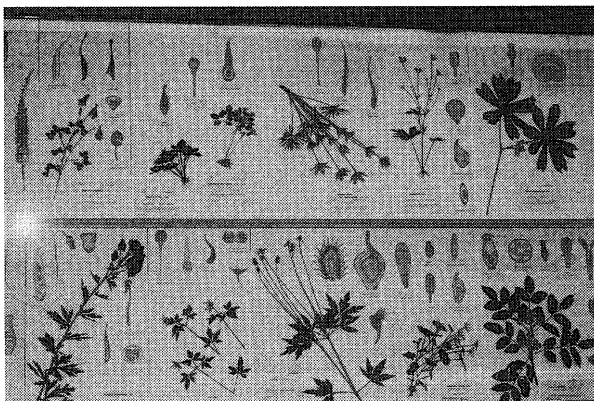
ロンドンの東の間の滞在を終え、いよいよ大西洋を越えて最後の訪問国アメリカへ。これまでの飛行機は荷物重量については厳しかったが、中身検査はさほどではなかった。しかし今回は全くの逆でアメリカンエアーなる航空会社は中身チェックがすこぶる厳しかった。やましい物は持ち込んではいなかったのだが、このバックは何時何処で誰と梱包したの

か、それ以降誰かの手に渡したのか等聞かれ、また、手荷物バックの中に入れておいたロンドンでの土産の箱の中まで厳しくチェックされた。私の人相が怪しいと見られたためか、ちょっと気分を害した。ボストンまでの約8時間の機中生活。エコノミーではやはりしんどい8時間であった。

ボストンに到着して空港を出る頃には辺りはもう薄暗かった。ボストンは学園都市とも言われ、屋外でアルコールを飲むことは禁止されていた。このためにサンフランシスコに行くまでアルコール補給に苦労したものである。

翌日ボストンマラソンのゴール地点をはじめ、アメリカ独立に関係した建物やボストン美術館等文化施設の観光に終始した。結局ボストンに2泊して、公式訪問地レキシントンに移動した。途中マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学を見学しながら移動した。特にハーバード大学の自然史博物館は一般にも公開されていて、我々が訪れたときには、小学生が理科及び社会の勉強で入館していた。1グループ20名程度であったが、それを引率する先生は6名程いた。何と羨ましい。この博物館の目玉は、全てガラスで作られた植物の標本と、地球上に存在するほとんど全ての鉱物の標本であった。このような専門性の非常に高い施設を誰もが自由に利用できる素晴らしさを体験した。

いよいよレキシントン。我々が宿泊したホテルはレキシントン郊外にあり、辺りには何もない林の中であった。食事を取るためダウンタウンまで出かけるにも車で10分程かかる所であった。ホテルで食事を取ると高くつくので、従業員に頼んでダウンタウンまで車で送ってもらった。帰りはタクシーを呼ぶことにしたが、これが間違いの元になった。夕食を終えレストランの従業員にタクシーを頼んだ。でも、ここで大問題発生。実はこの町にタクシーは無かったのだ。しかし、レストランの優しいお嬢さんが何処かへ電話で頼んでくれた。すると白タクらしきものが1時間程待つようやく来てくれた。やっ



との思いでそれに乗り込むと、今度はその車のすぐ後ろに着けていたパトカーからポリスが降りてきて、我々の車の運転手に何事が言っている。運転手はしきりに「ソーリー、ソーリー」の連発。話の内容は良く分からなかったが、推測するにやはり白タクであったため注意をされたらしい。でも無事解放され何とかホテルに到着。外国では何が起こるか予想がつかない。でも無事であったので良き体験となった。

11月23日サンクスギビングデーのため、レキシントンでは2日間の慌ただしい日程の中の学校訪問となった。ここでは、小学校、中・高等学校、養護学校の3校への訪問であった。前述したように、マサチューセッツ州ではアメリカでも障害児教育の先進的実践ををしていて、障害者一人ひとりに対するサポート体制の充実さには学ぶべきことが多かった。特にレキシントンでは街全体の予算の50%を教育予算にするとというような、教育に対する熱の入れようはすごいものがあった。

いよいよこの研修も最後となりサンフランシスコへ移動したが、ボストンとサンフランシスコの時差が2時間あり、飛行機で6時間半程時間がかかった。いかにアメリカは広大であるかが分かった。サンフランシスコでは最後の研修、といっても最後の観光であった。ゴールデンブリッジ、ミューアウッド、サウスリート見学、そして有名なケーブルカーの乗車体験と最後のアメリカを満喫した。そして、最終日はサンフランシスコからの直行ではなく、早朝4時30分ホテル出発でサンノゼ空港発シアトル乗り換え成田と、合計12時間程の機中生活で、時差の関係で成田には26日午後4時過ぎに到着となった。

翌27日からすぐ授業と、なかなか強行なスケジュールではあったが、25日間の海外研修では、日本各地の色々な校種の先生方と交流ができ、さらに先進国のみならず、我々が利便さを求めるあまり忘れてしまった教育の原点を思い出させてくれた国、教育事情ばかりでなく食文化をはじめいろいろな異文化を直接肌に触れ感じて来ることができ、この体験は私にとって一生の宝となった。本当に「百聞は一見に如かず」の心境であった。

【参考文献】

- <http://www.naec.go.jp/education/asia/betnam/contents/001.htm>
- <http://www.naec.go.jp/education/europe/england/contents/001.htm>
- <http://www.naec.go.jp/education/america/america/contents/001.htm>